



障がい者スポーツの認知度の現状 ～北海道における障がい者スポーツ大会に着目して～

札幌大学東原ゼミA班

清崎鉄馬 澤野康介 秋山愛莉 小島加奈恵

目次

1. 背景
2. 目的
3. 障がい者スポーツの現状
4. 北海道障がい者スポーツ大会調査
5. 結果および考察
6. 政策提言
7. まとめ
8. 参考文献



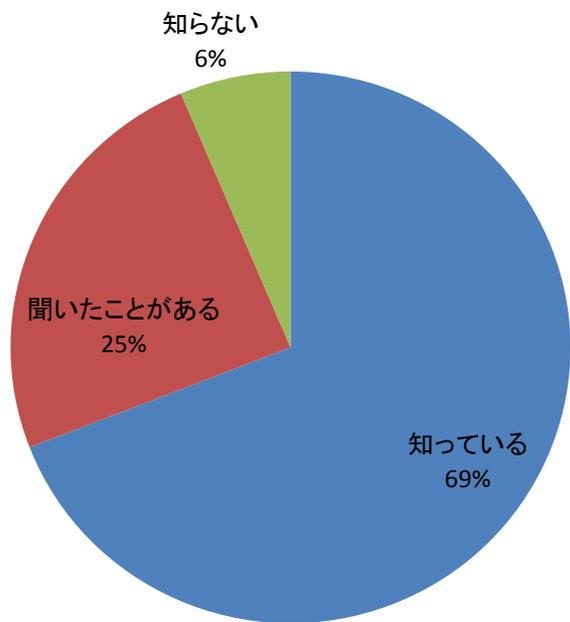
1.背景

- 障害者の**40.5%**がスポーツ・芸術活動に参加している。
➡ 目的は医療的側面と精神的側面。
- パラリンピックなどがメディアで取り上げられ、障がい者が積極的にスポーツ行うことになったことで競技普及の現れが出ているが、健常者が行うスポーツに比べてさほど認知度が上がっていない。

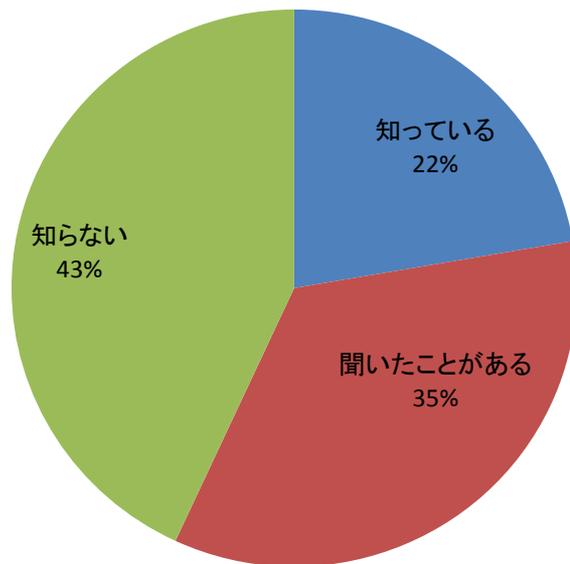


静岡県「第3回全国障がい者スポーツ大会」が行われた際に地域住民(小・中・高)を対象に行った障がい者の認知度調査

パラリンピックについて



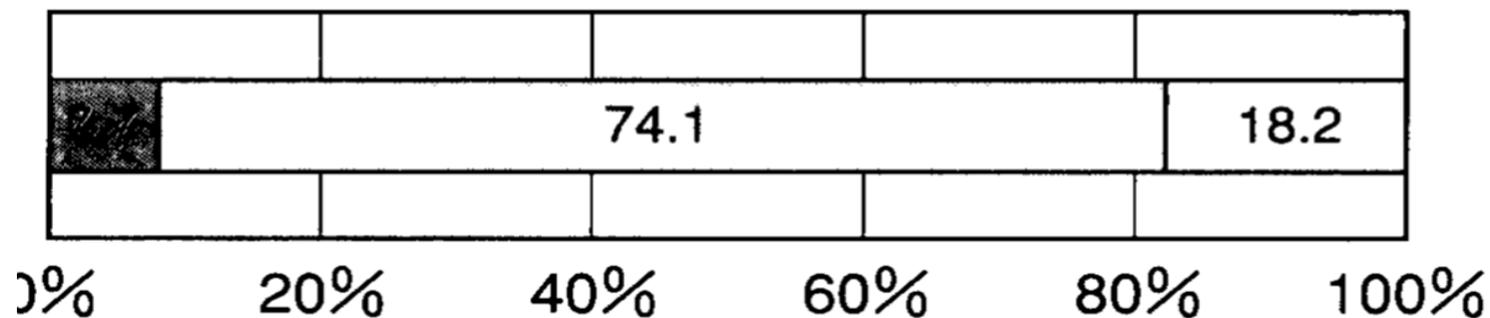
全国障害者スポーツ大会について



和久田佳代・石塚和重2005年「全国障害者スポーツ大会が障害者スポーツへの認知度や意識に及ぼす影響」



- 障がい者との関わり調査により「実際に見たことがある」と答えたのが7.7%と一般人の関わり・関心の低さが読み取れる。



■ 実際に見たことがある □ テレビなどで見たことがある
□ 見たことがない

和久田佳代・石塚和重2005年「全国障害者スポーツ大会が障害者スポーツへの認知度や意識に及ぼす影響」



2.目的

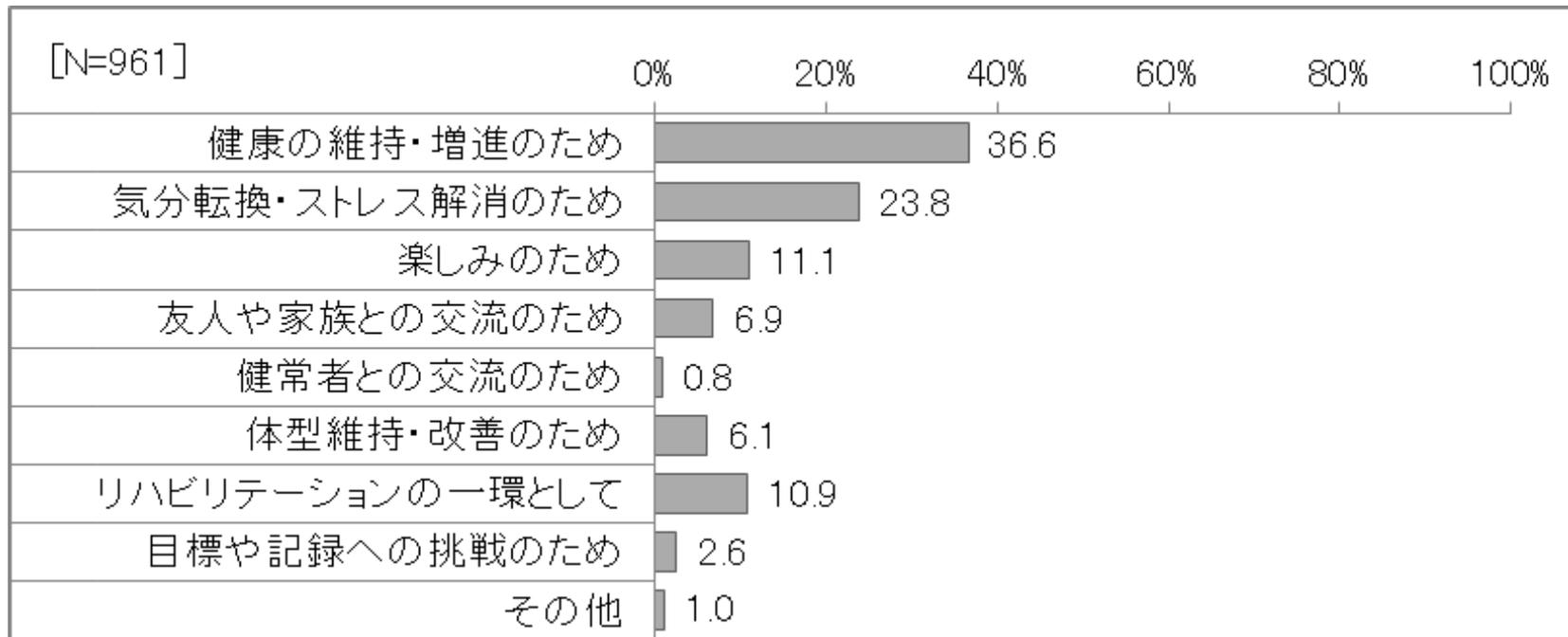
東京オリンピックが**2020年**に決まったいま、オリンピックだけでなく、パラリンピックも盛り上げていくためにも障がい者スポーツそのものの認知を高めていく。

そのために障がい者スポーツを障がい者と健常者が共にできる「場」を考えていき、相互の理解・関心を高め、障がい者スポーツをより充実させたものへとしていく。



3.障がい者スポーツの現状

- 障がい者がスポーツをする主な目的としてはリハビリテーションといった医療的側面と楽しみ、ストレス発散といった精神的側面がある。



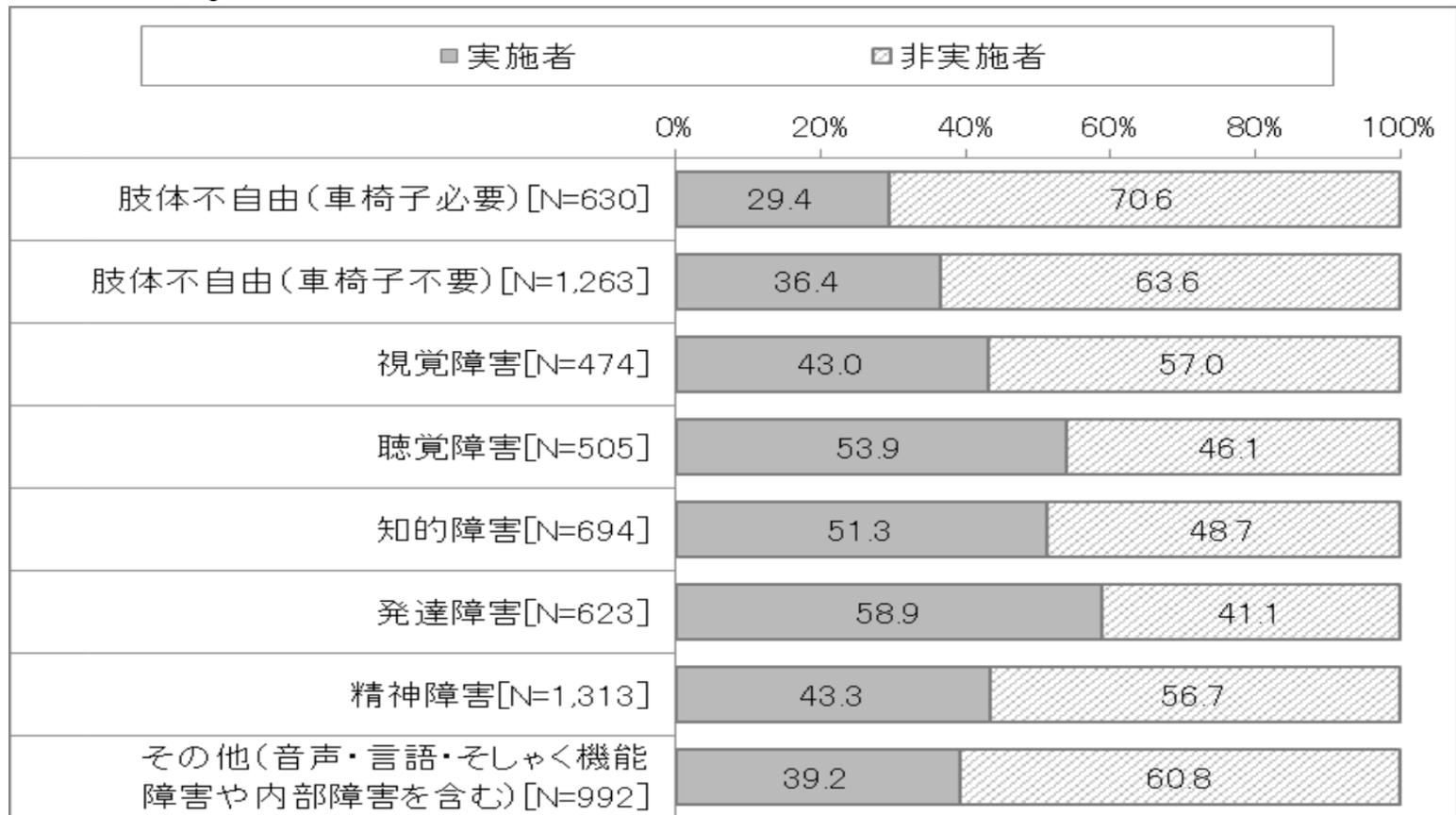
笹川スポーツ財団「障害児・者のスポーツライフに関する調査」

○ 障がい種別のスポーツ目的

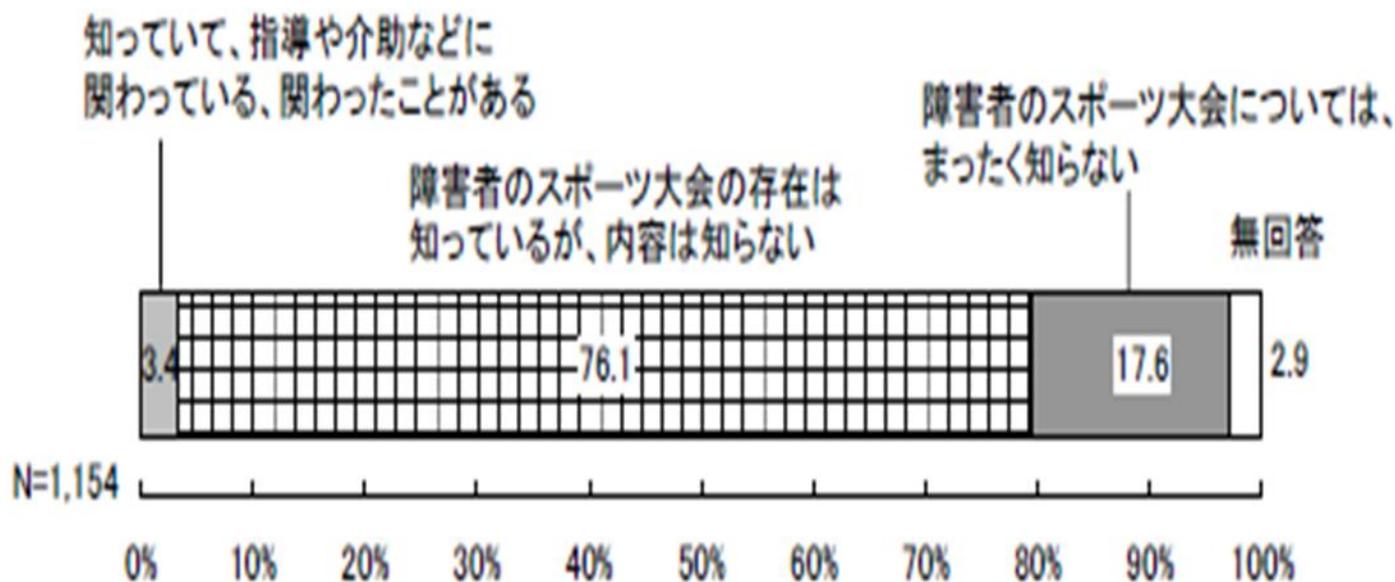
	肢体不自由(車椅子必要)	肢体不自由(車椅子不要)	視覚障害	聴覚障害	知的障害	発達障害	精神障害	その他(音声・言語・そしゃく機能障害や内部障害を含む)
	N=61	N=273	N=92	N=110	N=13	N=46	N=322	N=186
健康の維持・増進のため	26.2	36.7	38.0	36.4	30.8	45.7	34.2	39.2
気分転換・ストレス解消のため	13.1	16.5	23.9	29.1	15.4	26.1	30.7	21.0
楽しみのため	18.0	11.0	10.9	15.5	15.4	4.3	8.1	11.8
友人や家族との交流のため	8.2	6.8	8.7	7.3	0.0	6.5	5.6	6.5
健常者との交流のため	3.3	0.4	0.0	0.0	7.7	0.0	1.2	1.1
体型維持・改善のため	4.9	3.0	6.5	6.4	7.7	4.3	9.0	3.8
リハビリテーションの一環として	21.3	22.8	7.6	1.8	7.7	8.7	8.4	14.0
目標や記録への挑戦のため	4.9	2.1	3.3	3.6	15.4	4.3	1.6	1.1
その他	0.0	0.8	1.1	0.0	0.0	0.0	1.2	1.6

笹川スポーツ財団「障害児・者のスポーツライフに関する調査」

- 障がい種別の過去一年間のスポーツ・レクリエーション実施率を見ていくと肢体不自由が低くなっているものの、他の障がい者では全体的に高いといった結果がでている。



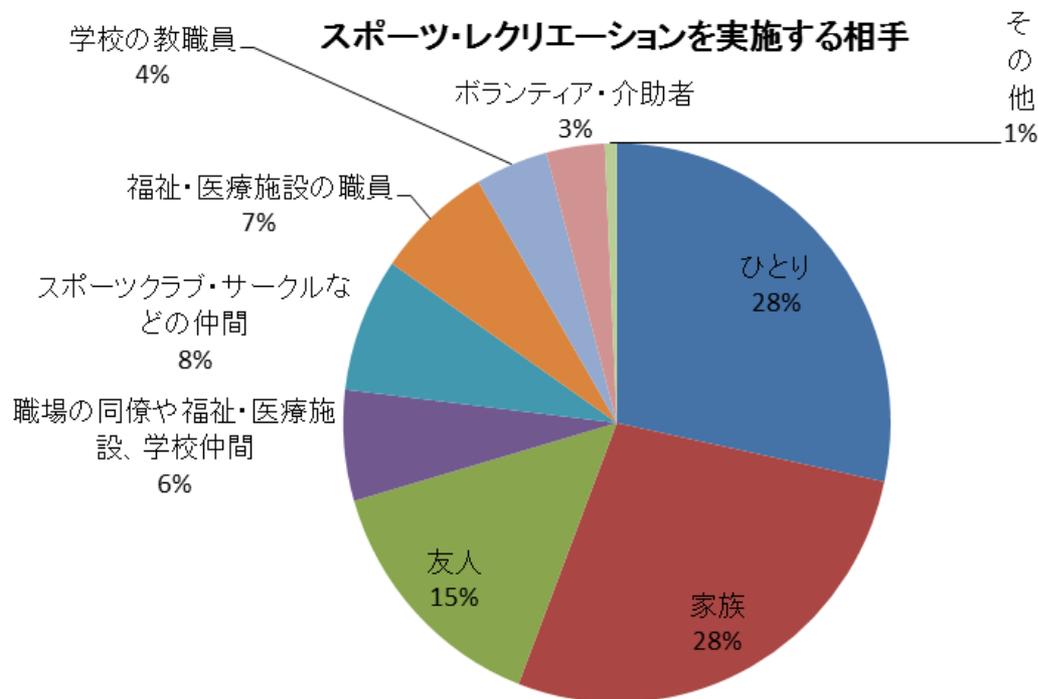
- 障がい者と健常者の社会参加活動に関する認知度を静岡県裾野市「市民調査」でやったところ、「関わったことがある」と答えたのが**3.4%**と、関わりの低さが読み取れる。



大橋俊二2006年
「裾野市市民調査」



- 障がい者がスポーツを実施するうえでの相手の割合は「ひとり」、「家族」、「友人」と身近な人たちが多くスポーツでの他者との交流が少なかった。



笹川スポーツ財団「障害児・者のスポーツライフに関する調査」

障がい者スポーツの現状を踏まえて

障がい者のスポーツでの関わり・交流がない。



「場」や「機会がない」

こうした状況があることから実際に北海道障がい者スポーツ大会の調査をし、北海道での障がい者大会状況を見ていこうと思う。



3.北海道障がい者スポーツ大会の調査

【対象】

- ①札幌市障害者スポーツ大会(すずらんピック)
- ②北海道車椅子バスケットボール大会

【日時】

①一回目:2014年5月18日札幌市身体障害者福祉センター 卓球(身体、知的対象)

二回目:2014年5月24日札幌市白石区体育館 バスケットボール(知的対象)

三回目:2014年6月1日札幌市円山陸上競技場 陸上(身体、知的対象)

②2014年6月28日札幌市西区体育館 車椅子バスケットボール

【内容】観戦者状況、大会の認知度



すずらんピック【卓球】



すずらんピック【バスケットボール】



すずらんピック【陸上】



北海道車椅子バスケットボール大会



5.結果および考察

- すずらんピックを見ていくと卓球、バスケットボールに比べ陸上ではボランティアや観客、選手数の多さから三つの中でも認知が高かったといえる。
- 車椅子バスケットでは観客数が30人程度と少ない結果であったが、各チームに健常者を一人混ぜ、試合を行うなど健常者との直接的な関わりが見て取れた。

共通課題

健常者との関わり・障害者スポーツの参加人口を増やすことで観客数・認知度につなげる

6.政策提言

①札幌大学を利用したブラインドサッカーによる障がい者との交流授業

○ ブラインドサッカーとは

ブラインドサッカーとは視覚障がいの選手による5人制サッカーであり、フィールドプレイヤーはアイマスクとヘッドギアを装着する。選手は鈴が入ったボールの音やゴール裏から指示を出すコーチの声を頼りにプレーする。



①札幌大学を利用したブラインドサッカーによる障がい者との交流授業

- なぜ札幌大学でブラインドサッカーなのか

札幌大学で年に一度ある「スペシャルウィーク」といった学生企画の授業を活用し、ブラインドサッカーという障がい者スポーツを体験してもらおう。



学生たちが障がい者スポーツを接する機会を与え、興味・関心を持ってもらう。



①札幌大学を利用したブラインドサッカーによる障がい者との交流授業

札幌大学で交流授業をする利点

周辺に小・中・高の学校があるため幅広い世代を巻き込むことが可能

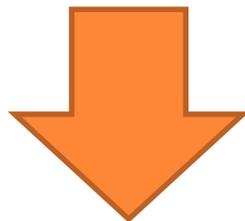
サッカー部員らのサポートを借りることができ

サッカーをするための環境が整っている

障がい者スポーツを知ってもらう「場」をつくりやすい

②大学内〈ニュー障がい者スポーツ〉教室の開設

考案:健常者+障がい者



両者ともに楽しめる
スポーツ

新たなニュースポーツをつくる



②大学内〈ニュー障がい者スポーツ〉教室の開設

札幌大学における「地域スポーツ・文化総合クラブ」である「めえ〜ず」などと連携を図りながら、学生と障がい者で「新たな障がい者スポーツ」を考案していく。



そうすることでスポーツの純粹な楽しさを皆で実感することができ、相互理解にもつながり、障がい者スポーツが盛り上がっていく1つのきっかけになるのではないかと考えた。



7.まとめ

障がい者スポーツの認知度を上げるためには、今後の未来を担っていく若い世代が障がい者スポーツに対する興味・関心を高める必要がある。

そのため、障がい者との関わりは必要不可欠であり、スポーツを通してお互いが「交流する場」を設ける必要があると考えた。



参考・引用文献

- 和久田佳代・石塚和重 聖隷クリストファー大学
2005年「全国障害者スポーツ大会が障害者スポーツへの認知度や意識に及ぼす影響」
- 笹川スポーツ財団「障害児・者のスポーツライフに関する調査」

http://www.ssf.or.jp/research/report/pdf/contract2013_2-1.pdf

- 大橋俊二2006年「裾野市市民調査」
- <http://www.city.susono.shizuoka.jp/ma/download/2516/4-5.pdf>

